

Title	アサーションの文脈依存性についての実験的検討 : 話し手と聞き手の観点から
Author(s)	三田村, 仰; 松見, 淳子
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 77-86
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9245">https://doi.org/10.18910/9245</a>
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## アサーションの文脈依存性についての実験的検討

### 話し手と聞き手の観点から

三田村 仰(関西学院大学大学院文学研究科)

松見淳子(関西学院大学文学部)

アサーションとは一般に「適切かつ率直な自己主張」と定義される。一方で適切な自己主張はしばしば間接的であるとされている(Brown & Levinson, 1978)。本研究では、話し手における自己主張の正当性の高低という文脈の効果について、話し手と聞き手の両側面から検討を行った。実験1では、108名の参加者が、自己主張を必要とする場面において、どういった自己主張を行うか自由記述で回答をおこなった。その結果、話し手の自己主張の正当性が低い文脈において、より冗長で謝罪表現が多くなることが示された。実験2では、33名の参加者が、自己主張の聞き手となる場面において、直接的自己主張と間接的自己主張とのモデルに対し印象評定を行った。その結果、話し手の自己主張の正当性が低い文脈において、特に間接的自己主張を直接的自己主張よりも適切と評価することが示された。本研究の結果より、状況の文脈によって適切な自己主張方略が変化するというアサーションの文脈依存性が示唆された。

キーワード: アサーション、文脈依存性、対人コミュニケーション、ポライトネス

### 問題と目的

アサーションとは

アサーションとは、自他を尊重した自己主張、言い換えれば適切な自己主張である(三田村・松見, 印刷中 a)。アサーションを教えるアサーション・トレーニングは、米国で発展し、今日わが国において広く注目されている(平木, 2004)。

「アサーション(assertion, assertiveness)」の語は直訳すれば「自己主張」であるが、適切な行動である点において、単なる「自己主張」とは異なるとされる(三田村・松見, 印刷中 b; Rakos, 1979)。なお本研究では、自己主張の意味を特に、依頼・断りの意味で用いることにする。

直接的自己主張と基本的人権

アサーションはほとんどの場合、適切であるのみならず、「率直であること」が強調され、「率直かつ適切な自己主張」と捉えられる。アサーションにおける「率直さ」とは言い換えれば、自己主張における直接性、簡潔さ、余計な謝罪表現を含まないことといった特徴を意味する(Lange & Jakubowski, 1976)。こうした率直型アサーションの観点からは、直接的な自己主張は、基本的人権であり、それ自体は普遍的に正当であると考えられている(三田村・松見, 印刷中 a)。また、率直な自己主張は、話し手が聞き手に対しても率直な自己主張を推奨することにより、適切となる(平木, 1993)ともいわれる。

初期のアサーション・トレーニングにおいては「理不尽な依頼をされた場面」や「明らかに相手に非があるような場面(購入した商品の欠陥など)」など自己主張の正当性が高い文脈を想定してきた(Lange & Jakubowski,

1976)。また、アサーションは、直接的な自己主張に対し寛容な米国文化で発祥し、発展してきた(三田村, 2008)。そのため直接的な自己主張が適切と考えられるのは、初期のアサーション・トレーニングの文脈においては自然なことであったと考えられる。

適切さの文脈依存性

一方で、自己主張における適切さの意味をどう取るかによって、アサーション(適切な自己主張)は、必ずしも直接的な自己主張ではありえない。多くの場合、行動の適切さとは文脈に依存すると考えられている(Argyle & Henderson, 1985; Brown & Levinson, 1978; 清水・小杉, 印刷中)。実際 Price & Bouffard (1974)によれば、適切と受け取られる行動の形態は、文脈によって変化することが示されている。

間接的自己主張と自己主張の正当性

率直型アサーションが直接的自己主張の正当性を強調するのに対し、一般に他者に配慮して自己主張する場合、人は間接表現を使用する。Brown & Levinson (1978)によれば、文化普遍的に、話し手は聞き手の面目(face)を守るために、文脈にあった適切な自己主張方略を選択するとされる。その際、しばしば適切な自己主張方略とされるのが間接表現である(Holtgraves & Yang, 1990; Okamoto, 1992)。

話し手が間接的自己主張を使用する要因には、聞き手との関係性(石川・無藤, 1990)、自己主張内容が聞き手に及ぼす負担度(岡本, 1986)、話し手と聞き手との間の権利と義務の相対的關係(Thomas, 1995)などが挙げられる。

Thomas(1995)は、話し手と聞き手との間の権利と義

務の相対的關係に依じて、実際に人が間接表現を用いる例を自らの体験をもとに紹介している。地方ではバスがバス停以外の場所でも停まってくれる。そういった状況で Thomas(1995)は、バス停で降りたいある人が運転手に「次、お願いしますね」と軽い言い方をするのに対し、バス停でない場所で降りたいある別の人が運転手に「次の信号を越したところで降りしていただけますかしら」とより丁寧に言うのを聞いたという。この例では、話し手は自らの自己主張が正当な文脈においては簡潔に直接的に自己主張するが、自らの自己主張の正当性が低い文脈では、より冗長に間接的に自己主張することを示している。

### 本研究における「正当性」の定義

既に挙げたバス停の例において、Thomas(1995)は話し手の自己主張方略が変化する理由を「権利と義務」という言葉を用いて説明している。しかし、アサーションの文脈で論じられる「権利」とはしばしば「義務」を負わない基本的人権である。そこで、本研究では、バス停の例のように、文脈に応じて変化する、社会的規範からみた話し手の自己主張に対する妥当性や受け入れやすさを「正当性」と定義することにする。

### 本研究の目的

本研究では、話し手が自己主張方略を変化させる文脈的な要因として、話し手による自己主張の正当性に焦点を当てる。また本研究では、話し手による自己主張の正当性の変化によって生じる、a. 話し手自身の自己主張方略の変化と b. 聞き手による、話し手の自己主張に対する印象評価の変化、の双方を検討する。

話し手は自己主張しようとする際、自らの自己主張の正当性が高いほどより直接的に自己主張し、自己主張の正当性が低いほど謝罪表現を含む冗長でより間接的な自己主張を行うと考えられる。一方、聞き手においても、話し手の自己主張の正当性が高いほど話し手の自己主張を、より適切なものとして好意的に捉え、正当性が低いほど話し手の自己主張を、より不適切なものとして嫌悪的に捉えると考えられる。

さらに、聞き手においては、話し手の自己主張の正当性が高い文脈では直接的自己主張を、正当性が低い文脈では間接的自己主張を、それぞれより適切なものとして好意的に捉えると考えられる。

## 実験 1

実験 1 の目的は、自らの自己主張の正当性が高い文脈に比べ低い文脈で、話し手がより多く間接表現や謝罪表現を使用し、より冗長な自己主張を行うかを検討することであった。

### 方法

実験参加者 近畿地方の専門学校生 108 名(男子 45 名、女子 63 名)、平均年齢 19.78 歳 ( $SD = 2.99$ )。実験の実施期間は 2009 年 6 月から 2009 年 9 月であった。

自己主張場面の選択 自己主張が必要になる刺激場面を作成するため、近畿地方の大学生および専門学校生 98 名(男子 51 名、女子 47 名)、平均年齢 20.15 歳 ( $SD = 2.76$ )を対象に自己主張が困難な場面を収集した(三田村・松見, 2009a)。得られた場面を分類した結果、「依頼・断り」、「意見表明」、「注意・指摘」、「告白」、「情報提供」、「援助・協力」の場面が得られた。

自己主張場面 三田村・松見(2009a)で収集した自己主張が困難な場面が多かった「依頼・断り」の記述を参考に「飲み会の誘いを断りたい場面」、「貸したお金を返して欲しい場面」、「アルバイトのシフトを交代して欲しい場面」の 3 場面を選択し、更にこの 3 場面について、自己主張の正当性が高い文脈(正当性高条件)と低い文脈(正当性低条件)を設定して刺激場面を作成した。各場面は次の通りであった。

(1)場面 1: アルバイトのシフト交代の依頼 「あなたはあるアルバイトをしています。急な用事であなはどうしても来週アルバイトに出られなくなってしまいました。そこで、あるアルバイト仲間にシフト交代をお願いしたいと思っています。いまアルバイト先で、そのアルバイト仲間が帰り支度をしています。あなたなら何と言いますか。」

(a) 正当性高条件 「ちなみに、あなたはこれまで同様の場面でそのあるアルバイト仲間に頼まれた際、アルバイトを代わってあげたことが何度もあります。」

(b) 正当性低条件 「ちなみに、あなたはこれまで同様の場面でそのあるアルバイト仲間に頼まれた際、アルバイトを代わってあげたことが一度もありません。」

(2)場面 2: 貸したお金の返済請求 「あなたは今欲しいものがありお金が必要になりました。そこで、友人に貸していたお金を返してもらおうと思っています。いま、友人が隣の席に座っています。あなたなら何と言いますか。」

(a) 正当性高条件 「ちなみに、今日は返す約束の期日を 1 週間以上過ぎています。」

(b) 正当性低条件 「ちなみに、あなたは「返すのはいつでもいいよ」と相手に伝えていました。」

(3)場面 3: 飲み会の誘いに対する断り 「あなたは飲み会好きの友人に飲み会に誘われました。あまり気が進まないで断りたいと考えています。いま、友人が来週の飲み会に誘ってきました。あなたなら何と言いますか。」

(a) 正当性高条件 「ちなみに、前回誘われた際に

は、『今回だけでいいから』という友人との約束であなたは出席しました。」

(b) 正当性低条件 「ちなみに、前回誘われた際には、『次回は出席するから』と友人に約束してあなたは欠席しました。」

手続き 各参加者は、場面1から3のそれぞれ正当性高・低両条件(計6場面)について、自由記述で回答した。正当性高条件と正当性低条件の提示順序は参加者ごとに無作為に割り当てた。

分析方法 参加者の自由記述(発話内容)について、その文字数や使用している単語について分析を行った。

操作チェック 同一の実験参加者に、それぞれの場面において自己主張することがどれくらい正当だと感じるかを「完全に正当(6点)」から「完全に不当(1点)」までの6件法で回答を求めた。

結果

分析対象としたデータ 得られたデータは回答に不備がある場合および自己主張ができないと回答された場合を除いて、適宜最大限のデータを分析対象とした。自己主張ができないと回答したのはそれぞれ、場面1で男子1名、女子3名、場面3で女子5名であった。

操作チェック 正当性高・低条件における正当性の平均得点について対応のあるt検定を行った。その結果、正当性高条件と正当性低条件の平均得点はそれぞれ、場面1で5.10 (SD=0.94)と2.83 (SD=1.16) (t(97)=14.64)、場面2で5.08 (SD=1.18)と3.76 (SD=1.15) (t(97)=9.55)、場面3で4.84 (SD=1.06)と2.77 (SD=1.13) (t(97)=12.10)でいずれも正当性高条件が正当性低条件よりも有意に高得点であった(p<.01, N=98)。

各場面での自己主張における冗長性の検討 (1)場面間の比較 本研究では、3場面それぞれを質的に異なった状況であると仮定している。そこで、実際に各場面が等質でないことを確認するため、各場面における発話内容の平均文字数について、1要因3水準の分散分析を行った。

各場面の参加者(有効回答)数は、場面1で男子44名、女子61名、場面2で男子45名、女子63名、場面3で男子42名、女子58名であった。各場面の平均文字数は、場面1で80.30 (SD=30.86)、場面2で61.04 (SD=31.33)、場面3で42.64 (SD=19.97)であった。

分散分析の結果、場面間の平均文字数に有意な差が認められた(F(2, 134)=74.68, p<.01)。そこで、どの場面間に差がみられるかを検討するため多重比較(Bonferroni法)を行った。その結果、場面1と場面2、場面2と場面3、場面1と場面3のそれぞれにおいていずれも有意な差が認められた(p<.01)。

(2)文脈間の差と性差 自己主張することの正当性が低い文脈において、正当性が高い文脈と比べ、話し手の自己主張が冗長になるか(文脈の要因)、また、性差があるかを検討するため、各場面の正当性高・低条件における平均文字数について2(文脈:正当性高条件,正当性低条件)×2(性別:男子,女子)の分散分析を行った(Figure 1, 2, 3)。

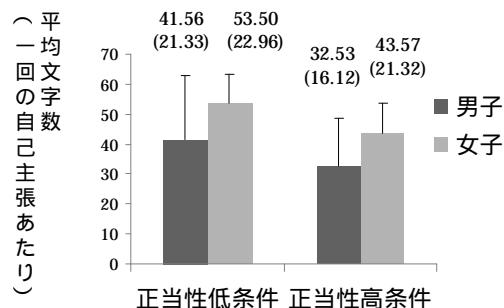


Figure 1. 場面1 アルバイトのシフト交代の依頼での発話内容における平均文字数

注) 図中の値は平均文字数、括弧内は標準偏差

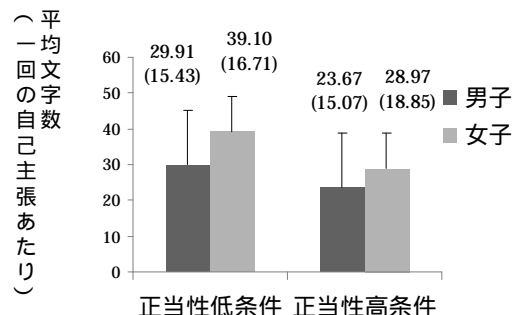


Figure 2. 場面2 貸したお金の返済請求での発話内容における平均文字数

注) 図中の値は平均文字数、括弧内は標準偏差

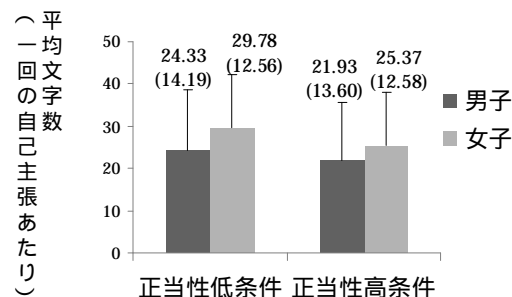


Figure 3. 場面3 飲み会の誘いに対する断りでの発話内容における平均文字数

注) 図中の値は平均文字数、括弧内は標準偏差

場面1で文脈(F(1, 104)=53.40, p<.01)と性別(F(1, 102)=5.02, p<.05)の主効果がそれぞれ有意であった。交互作用は認められなかった(F(1, 104)=0.33, ns)。

場面2では、文脈( $F(1, 106) = 51.64, p < .01$ )と性別( $F(1, 102) = 5.37, p < .05$ )の主効果および交互作用がみられた( $F(1, 106) = 4.86, p < .05$ )。単純主効果の検定の結果、男女それぞれにおいて、文脈の効果が有意であった(男子: $F(1, 106) = 12.41, p < .01$ , 女子: $F(1, 106) = 44.10, p < .01$ )。また、正当性の低条件において、女子の文字数が男子の文字数よりも多かった( $F(1, 212) = 9.07, p < .01$ )。

場面3では文脈の主効果のみが有意であった( $F(1, 98) = 9.53, p < .01$ )。性別の主効果と交互作用はみられなかった( $F(1, 98) = 0.49, ns$ ;  $F(1, 98) = 0.27, ns$ )。

いずれの場面も正当性高条件に比べ正当性低条件で平均文字数が多く、場面1では男子に比べ女子の平均文字数が多かった。

各場面での発話内容における謝罪表現の出現頻度の検討 得られた発話内容の中から各場面の正当性高・低両条件における謝罪表現を抽出した。謝罪表現は「すみません」、「すみません」、「悪い(けど)」、「ごめん」、「ゴメン」、「申し訳(ない)」の6つとした。

(1)場面間の比較 各場面における1回の自己主張(発話内容)あたりの平均謝罪数は、場面1で1.12回( $SD = 1.01$ )、場面2で0.39回( $SD = 0.74$ )、場面3で1.16回( $SD = 0.95$ )であった。

各場面の参加者(有効回答)数は、場面1で男子44名、女子62名、場面2で男子45名、女子62名、場面3で男子42名、女子58名であった。

場面間の平均謝罪表現数について、1要因3水準の分散分析を行った。その結果、場面間に有意な差が認められた( $F(2, 132) = 20.67, p < .01$ )。そこで、どの場面間に差がみられるかを検討するため多重比較(Bonferroni法)を行った。その結果、場面1と場面2、場面2と場面3においていずれも有意な差が認められた( $p < .01$ )。場面1と場面2において有意な差は認められなかった。

(2)文脈間の比較と性差 正当性高・低条件間の差を検討するため(文脈の要因)、また、性差があるかを検討するため、各場面の正当性高・低条件における平均謝罪表現数について2(文脈: 正当性高条件, 正当性低条件) × 2(性別: 男子, 女子)の分散分析を行った(Figure 4, 5, 6)。その結果、3場面全てにおいて有意に正当性高条件よりも正当性低条件での出現頻度が多く文脈の主効果が認められた(場面1:  $F(1, 104) = 11.35, p < .01$ ; 場面2:  $F(1, 105) = 19.66, p < .01$ ; 場面3:  $F(1, 98) = 40.51, p < .01$ )。いずれも性差(場面1:  $F(1, 104) = 1.21, ns$ ; 場面2:  $F(1, 105) = 0.14, ns$ ; 場面3:  $F(1, 98) = 0.15, ns$ )および交互作用(場面1:  $F(1, 104) = 0.51, ns$ ; 場面2:  $F(1, 105) = 0.67, ns$ ; 場面3:  $F(1, 98) = 0.79, ns$ )

は認められなかった。

各場面での発話内容におけるカテゴリーの分析 各場面において得られた発話内容の平均文字数と平均謝罪表現数の違いから、各場面はそれぞれ異なった状況であると考えられる。したがって以降は、それぞれの場面に合わせ別々の枠組みから検討を行った。

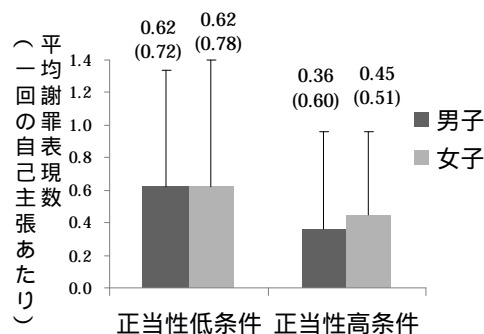


Figure 4. 場面1 アルバイトのシフト交代の依頼での発話内容における平均謝罪表現数  
注) 図中の値は平均文字数、括弧内は標準偏差

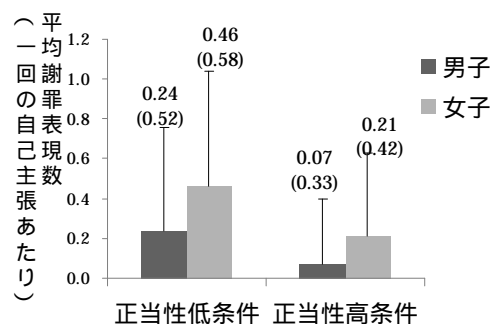


Figure 5. 場面2 貸したお金の返済請求での発話内容における平均謝罪表現数  
注) 図中の値は平均文字数、括弧内は標準偏差

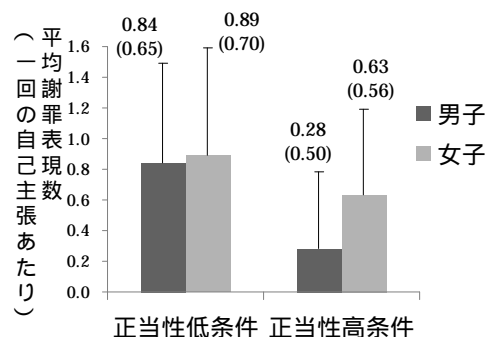


Figure 6 場面3 飲み会の誘いに対する断りでの発話内容における平均謝罪表現数  
注) 図中の値は平均文字数、括弧内は標準偏差

(1)場面1: アルバイトのシフト交代の依頼 (a)依頼表現の分類 正当性の高低により依頼表現の言い回しに差があるかを検討するため、発話内容の分類を行った。岡本(1986)は、「窓を開けてもらう」、「仕事を1時間ほど

Table 1 場面1および場面2における依頼表現のカテゴリー別出現比率

カテゴリー	場面1 アルバイトのシフト交代の依頼 (N=106)			場面2 貸したお金の返済請求 (N=107)		
	正当性 高条件	正当性 低条件	McNemar 検定	正当性 高条件	正当性 低条件	McNemar 検定
直接形表現	8.65%	6.73%	ns	31.48%	11.11%	**
疑問形表現	80.77%	78.85%	ns	50.00%	67.59%	**
願望表現	10.58%	14.42%	ns	5.56%	4.63%	ns
「貸して」表現				2.78%	5.56%	ns
示唆				8.33%	8.33%	ns

\*\* $p < .01$

注) 値は自由記述における各カテゴリーのパーセンテージ

手伝ってもら」などの依頼表現を分類するため 8 つの依頼型からなる依頼の分類カテゴリーを作成している。本研究で得られた発話内容において、岡本(1986)の依頼の分類カテゴリーに沿って分類した結果、8 つ全ての依頼型は認められず、また一部の発話内容は分類が困難であった。そこで、本研究においては、より簡潔にわかりやすく分類できるよう岡本(1986)の依頼の分類カテゴリーを参考にしつつ「アルバイトのシフト交代」という場面に合わせた独自の分類を行った。

分類は、「代わって」、「返して」など語尾が直接形でかつ命令、直接的依頼である「直接表現」、「代わってもらえる?」、「返してもらってもいい?」など語尾が疑問文である「疑問形表現」、「代わってほしいんだけど」、「お願いしたいんです」、「返してほしいな」など語尾が直接形で願望を述べた文である「願望表現」の 3 分類であった (Table 1)。

各カテゴリーについて正当性高・低条件間で 2 項検定を行った結果、いずれのカテゴリーにも正当性高・低条件間での有意な差(文脈の効果)は認められなかった ( $ns$ ,  $N = 106$ )。

(b)交換条件の提示 場面1のアルバイトのシフト交代の依頼の教示において、正当性高条件で「何度もシフトを代わってあげたことがある」とされているのに対し、正当性低条件では「一度もシフトを代わってあげたことがない」とされている。したがって、正当性低条件において話し手は、聞き手との間の不衡平感を是正するために、「今度代わるから」、「今度何か奢るから」などのシフトを代わってもら交換条件の提示をより多く行うと考えられる (Greenberg, Block, & Silverman, 1971)。

正当性高・低条件における交換条件の提示の有無について McNemar 検定を行った結果、正当性高条件と比べ正当性低条件において有意に交換条件の提示の頻度が高かった ( $\chi^2(1, N = 106) = 26.69, p < .01$ )。

(c)スピーチレベルシフト 一般に話し手は、普段、常体の言葉で会話している場合であっても、聞き手に対す

る配慮を示す必要がある場合に、一時的に常体から敬体に語尾を切り替えることや、反対に敬語で話していた状態から親しさを表現するために常体に切り替えることがある。これらの切り替えはスピーチレベルシフトと呼ばれる (宇佐美, 1995)。

正当性高条件と正当性低条件においては、その文脈の違いに応じて発話内容のスピーチレベルが常体から敬体にシフトすると考えられる。そこで、実際にスピーチレベルシフトが行われるかを検討した。2 項検定を行った結果、正当性高条件において常体だったものが正当性低条件で敬体に変わるというシフトが有意に認められた ( $p < .05, N = 106$ )。

(2)場面2: 貸したお金の返済請求 (a)依頼表現の分類 場面1と同様に、正当性の高低により依頼表現の言い回しに差があるかを検討するため、岡本(1986)の依頼の分類カテゴリーを参考に発話内容の分類を行った。場面2では、場面1での依頼表現の3分類に加えて、「貸してもらえる?」、「貸して」など「返して」ではなく「貸して」と表現した「「貸して」表現」、「あー、金ないなあ」など返してほしいことを暗に伝える「示唆」の5分類であった (Table 1)。

各カテゴリーについて、正当性高・低条件間で McNemar 検定を行った。その結果、正当性高条件において正当性低条件よりも有意に「直接形表現」が多く ( $\chi^2(1, N = 107) = 11.03, p < .01$ )、「疑問形表現」が少なかった ( $\chi^2(1, N = 107) = 7.61, p < .01$ )。

(3)場面3: 飲み会の誘いに対する断り (a)断り表現の分類 正当性の高低により、断り表現に差があるかを検討するため、場面3の断り表現について、カノックワ・ラオハプラナキット(1995)の「謝罪」、「理由」、「直接断り」の3要素に、本研究で多く得られた「また誘って」の要素を加えた4要素を用いて分類を行った (Table 2)。各要素について正当性高・低条件間で差がみられるか McNemar 検定を行った。その結果、正当性高条件において正当性低条件よりも有意に「謝罪」の出現頻度が

少なく( $\chi^2(1, N=100) = 23.36, p < .01$ )、「明示的断り」の出現頻度が多かった( $\chi^2(1, N=100) = 9.76, p < .01$ )。

Table 2 場面3 飲み会の誘いに対する断りにおける各分類要素の有無の頻度 (N=100)

要素	正当性 高条件	正当性 低条件	McNemar 検定
謝罪	43.00%	79.00%	**
理由	79.00%	77.00%	ns
明示的断り	70.00%	49.00%	**
また誘って	17.00%	23.00%	ns

\*\* $p < .01$

注) 値は自由記述における各要素のパーセンテージ

### 考察

実験1では、話し手は、自らの自己主張の正当性が高い文脈と比べ低い文脈において、より間接的で、冗長で謝罪を多く含む自己主張を行うと仮説を立て検討を行った。自由記述による自己主張の発話内容を分析した結果、実験1の仮説は支持された。また、話し手は、自らの自己主張の正当性が高い文脈と比べ低い文脈においては、より丁寧な言葉で、代替案を含めた自己主張を行い、直接表現を避ける傾向にあることが示された。

これらの結果から、自らの自己主張の正当性という文脈的要因に応じて、話し手は自己主張方略を変化させることが示された。

### 実験2

実験2の目的は、話し手における自己主張の正当性(文脈)の要因と自己主張方略の要因とによる、聞き手側の印象評価の変化を検討することであった。

#### 方法

実験参加者 大学生33名(男子9名、女子24名)、平均20.61歳( $SD = 1.89$ )が、実験刺激として用意された3つの場面の内1つの場面に無作為に割り当てられ、自己主張のモデルについての印象評定を行った。実験の実施期間は2009年2月から2009年7月であった。

手続き 実験室に呼ばれた参加者は、モデルである女性の写真が映し出されたパソコン画面の前に座らされ、最初に次の教示を受けた。「これから、この画面の人物(モデルの写真)による依頼もしくは断りのビデオを見ていただきます。この人物をあなたの友人だと考えて、あなたがその際に感じるだろう気分や印象をお答えください。」

その後、実験参加者は、1)場面と文脈の教示文の音読、2)場面のイメージ、3)パソコン画面による自己主張モデル(自己主張方略)の動画の視聴、4)印象評定用の質問

紙への回答、を計4回(自己主張のモデル2パターン × 正当性の文脈2パターン)繰り返した。

実験刺激 (1)場面と文脈についての教示文 場面の教示については、実験1で使用した3場面について、参加者が自己主張の聞き手となるように、文章を修正して用いた。修正した場面の教示は次のものであった。

(a)場面1: アルバイトのシフト交代の依頼 「あなたはあるアルバイトをしています。いまあなたはアルバイトが終わり、帰り支度をしています。すると、アルバイト仲間があなたの所に近づいてきました。」

(b)場面2: 貸したお金の返済請求 「いま、あなたの前に友人が座りました。あなたはこの友人にお金を借りています。」

(c)場面3: 飲み会の誘いに対する断り 「あなたは恒例の飲み会を開こうと考えています。あなたは、前回飲み会に誘った友人をまた飲み会に誘いました。」

文脈の教示についても実験1で使用した各刺激場面の正当性高・低条件それぞれにおける話し手と聞き手を入れ替えて使用した。

(2)自己主張のモデル(自己主張方略) 率直型アサーションについての文献(平木, 1993; Lange & Jakubowski, 1976)をもとに、率直型アサーション(直接的自己主張)と、率直型アサーションではない自己主張である受身的行動(間接的自己主張)とを想定したモデルの動画をそれぞれ3場面分作成した。また、発話内容については、実験1の結果として実際に得られたものをもとに作成した。モデルを演じたのは、20代女性であった。直接的自己主張では、より直接的な発話内容で、非言語的には笑顔でテンポの良いものとした。間接的自己主張では、謝罪の言葉を含み冗長な、間接的な発話内容で、非言語的にはすまなそうな表情で、発話にはためらいを示す間を含むものとした。

各3場面における直接的自己主張、間接的自己主張それぞれのモデルの SCRIPT を以下に示す。SCRIPTについては、第1著者(関東出身、男性)が主に標準語でもととなる台詞を作成し、近畿地方出身の女性の大学院生が、実験を行った近畿地方において、女性の用いる口語として自然に聞こえるように関西弁に変換を行った。

(a)場面1での自己主張方略 直接的自己主張: 「来週用事が出来ちゃってバイト出られへんくなったから代わってもらえへんかな?」(37文字分、7秒)、間接的自己主張: 「ちょっとお願いがあるんやけど、急用ができてしまって、バイト出られへんくなってんか。申し訳ないんやけど、バイト代わってもらえへんかな?ごめん。」(71文字分、13秒)。

(b)場面2での自己主張方略 直接的自己主張: 「前貸した千円返してもらいたいんやけど、いい?」(22文字

分、5秒)、間接的自己主張:「前貸した千円のこと覚えてる?ごめんやねんけど、ちょっと返してもらいたいんやんか。ごめんな。」(45文字分、9秒)。

(c)場面3での自己主張方略 直接的自己主張:「用事があるから行けへんわ。また誘って。」(19文字分、5秒)、間接的自己主張:「ごめん用事があって行けへんねん。ほんまごめん。また誘って。」(29文字分、6秒)。

自己主張のモデルの操作チェック 率直型アサーションについての文献(平木, 1993; Lange & Jakubowski, 1976)によれば、率直型アサーションは堂々とした自己主張であることが特徴であり、受身的行動はすまなそうな自己主張であることが特徴である。実験刺激として作成したそれぞれの自己主張のモデル(映像と音声)について、「堂々とした」と「すまなそうな」の2項目の評定を8名の大学院生が行った。対応のある  $t$  検定の結果、場面1、場面3の直接的自己主張( $M_s = 3.63, 4.63, SD_s = 1.51, 0.52$ )は、同じ場面の間接的自己主張( $M_s = 1.88, 1.75, SD_s = 0.83, 0.71$ )と比べ、より「堂々とした」印象であることが示された( $t_s(6) = 4.25, 7.18, p_s < .05, .01$ )。場面2の直接的自己主張( $M = 4.00, SD = 1.31$ )と間接的自己主張( $M = 2.88, SD = 1.46$ )ではこの差は認められなかった( $t(6) = 1.98, ns$ )。

また対応のある  $t$  検定の結果、場面1、場面2、場面3の間接的自己主張( $M_s = 4.88, 4.38, 4.13, SD_s = 0.35, 1.06, 1.36$ )は、同じ場面の直接的自己主張( $M_s = 3.50, 1.38, 2.38, SD_s = 1.20, 0.52, 0.92$ )と比べ、より「すまなそうな」印象であることが示された( $t(6) = 2.76, 6.25, 6.33, p_s < .05, .01, .01$ )。

(3)印象評定用の質問紙 (a)自己主張のモデルに対する快・不快感情 自己主張のモデルに対して聞き手が喚起する快・不快感情を測定するため、佐藤・安田(2001)の作成した日本語版 PANAS を使用した。日本語版 PANAS は、快項目(PA 因子)8項目、不快項目(NA 因子)8項目からなる。「非常にあてはまる(6点)」から「全くあてはまらない(1点)」の6件法であった。

(b)自己主張のモデルに対する友人関係満足感(以下、友人満足感) 自己主張のモデルの自己主張から、聞き手がどの程度モデルの人物を望ましい友人として捉えるかを測定するため、加藤(2001)の友人関係満足感尺度6項目を実験刺激に合わせ一部修正し使用した。修正した友人関係満足感尺度6項目は、「自分を受け入れられていると感じる」、「とても気持ちを通じ合っている」、「自分を本当に理解してくれている」、「心から友達と呼べる」、「好かれている」、「自分を支持してくれている」で、それぞれ「よくあてはまる(4点)」から「あてはまらない(1点)」の4件法であった。

(c)自己主張のモデルから受ける聞き手の負担感(以

下、負担感) 自己主張のモデルの自己主張によって聞き手がどの程度負担感をもつかを測定するため、加藤(2001)の認知的評価尺度から脅威因子の3項目を使用した。「よくあてはまる(4点)」から「あてはまらない(1点)」の4件法であった。

(d)自己主張のモデルに対する適切さ(以下、適切さ) 自己主張のモデルの自己主張に対して聞き手が評価する適切さを測定するため、適切さについて、「相手の振る舞いは適切だと思う」と「相手の振る舞いは不適切だと思う」の2項目について「非常にそう思う(4点)」から「全くそう思わない(1点)」の4件法で評定させた。2つ目の項目は逆転項目として使用した。

## 結果

場面間の比較 実験1の結果から3つの場面は異なった状況であると考えられる。そこで、各尺度得点において場面間に差がみられるかを検討するため自己主張方略および文脈の各得点をもとに平均得点を算出し、これを従属変数とする1要因3水準(参加者間計画)の多変量分散分析を行った。その結果、PA(快感情)得点とNA(不快感情)得点において( $F_s(2, 30) = 0.13, 0.67, ns$ )有意な差はみられなかった。友人満足感、負担感、適切さの3尺度の得点において、場面間に有意な差が認められた( $F_s(2, 30) = 3.98, 4.30, 5.89, p_s < .05, .05, .01$ )。そこで、どの場面間に差がみられるかを検討するため多重比較を行った。友人満足感においては場面1と場面3の間に( $p < .05$ )、負担感においては場面1と場面2との間に( $p < .05$ )、適切さにおいては場面1と場面2との間に( $p < .01$ )それぞれ有意な差がみられた。したがって、以降は場面ごとに分析を行う。

各場面における文脈と自己主張方略の効果 文脈(正当性高・低条件)と自己主張方略(直接的自己主張・間接的自己主張)の効果を検討するため、各尺度得点を従属変数として場面ごとに、2(文脈: 正当性高条件、正当性低条件) × 2(自己主張方略: 直接的自己主張、間接的自己主張)の分散分析(参加者内計画)を行った。場面ごとの各尺度得点を Table 3 に示す。

(1)場面1: アルバイトのシフト交代の依頼 PA(快感情)得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった( $F_s(1, 10) = 0.04, 2.14, 1.44, ns$ )。NA(不快感情)得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった( $F_s(1, 10) = 3.73, 2.85, 1.48, ns$ )。友人満足感得点において、自己主張方略( $F(1, 10) = 16.01, p < .01$ )と文脈( $F(1, 10) = 53.86, p < .01$ )の主効果がそれぞれ有意で、直接的自己主張よりも間接的自己主張で、また正当性低条件よりも正当性高条件で、それぞれ高得点であった。



Table 3 正当性の文脈と自己主張方略を独立変数とした場面ごとの各尺度得点 (N=33)

自己主張方略 正当性の文脈	直接的自己主張		間接的自己主張	
	正当性高条件	正当性低条件	正当性高条件	正当性低条件
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
場面1 アルバイトのシフト交代の依頼 (N = 11)				
PA	15.91 (4.99)	13.64 (2.80)	15.00 (3.87)	14.27 (3.44)
NA	20.60 (5.99)	24.91 (7.02)	19.64 (6.20)	22.09 (6.69)
友人満足感	14.09 (4.04)	7.36 (1.50)	17.82 (3.95)	11.00 (2.72)
負担感	5.73 (1.68)	9.36 (2.34)	4.18 (1.33)	7.18 (2.27)
適切さ	6.46 (1.23)	3.55 (1.23)	7.36 (0.77)	6.46 (1.88)
場面2 貸したお金の返済請求 (N = 11)				
PA	14.18 (8.57)	16.82 (8.24)	11.55 (4.059)	12.64 (5.03)
NA	25.91 (7.92)	21.00 (8.74)	28.55 (8.20)	22.36 (7.05)
友人満足感	10.78 (3.88)	12.36 (3.32)	11.45 (4.50)	12.18 (4.60)
負担感	4.45 (1.92)	4.36 (1.86)	4.73 (1.85)	4.09 (1.58)
適切さ	7.54 (0.66)	6.82 (1.23)	7.36 (0.77)	6.82 (1.23)
場面3 飲み会の誘いに対する断り (N = 11)				
PA	16.36 (8.45)	15.45 (6.50)	13.27 (5.64)	14.36 (7.43)
NA	21.36 (7.58)	22.45 (6.29)	20.64 (6.79)	24.18 (6.74)
友人満足感	9.36 (3.53)	8.09 (2.70)	11.18 (4.31)	10.27 (3.58)
負担感	6.00 (3.19)	7.27 (3.07)	5.45 (2.58)	6.27 (3.04)
適切さ	6.36 (0.64)	5.27 (1.48)	7.09 (0.79)	6.18 (1.80)

注) PA: モデルの自己主張に対する快感情, NA: モデルの自己主張に対する不快感情, 友人満足感: モデルに対する友人関係満足感, 負担感: モデルの自己主張による負担感, 適切さ: モデルの自己主張に対する適切さ。

負担感得点において、自己主張方略 ( $F(1, 10) = 33.09, p < .01$ )と文脈 ( $F(1, 10) = 30.56, p < .01$ )の主効果がそれぞれ有意で、直接的自己主張よりも間接的自己主張で、また正当性低条件よりも正当性高条件で、それぞれ高得点であった。交互作用はみられなかった ( $F(1, 10) = 0.00, ns$ )。

適切さ得点については、自己主張方略 ( $F(1, 10) = 62.55, p < .01$ )と文脈 ( $F(1, 10) = 15.78, p < .01$ )の主効果、交互作用 ( $F(1, 10) = 6.29, p < .05$ )がそれぞれ認められた。単純主効果の検定を行った結果、正当性低条件の文脈において、間接的自己主張が直接的自己主張よりも有意に高得点で ( $F(1, 20) = 38.93, p < .01$ )、直接的自己主張において、正当性高条件よりも正当性低条件で有意に得点が低かった ( $F(1, 20) = 46.55, p < .01$ )。正当性高条件の文脈における自己主張方略の効果 ( $F(1, 20) = 3.80, ns$ ) および間接的自己主張における文脈の効果 ( $F(1, 20) = 2.12, ns$ ) は有意にはみられなかった。

(2)場面 2: 貸したお金の返済請求 PA(快感情)において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった ( $F_s(1, 10) = 2.93, 4.17, 1.60, ns$ )。NA(不快感情)得点において、文脈の

主効果が有意で ( $F(1, 10) = 10.71, p < .01$ )、正当性低条件より正当性高条件で高得点であった。友人満足感得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった ( $F_s(1, 10) = 0.04, 1.45, 0.62, ns$ )。負担感得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった ( $F_s(1, 10) = 0.00, 2.22, 0.48, ns$ )。適切さ得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった ( $F_s(1, 10) = 0.10, 4.92, 0.38, ns$ )。

(3)場面 3: 飲み会の誘いに対する断り PA(快感情)得点において自己主張方略の主効果が有意で ( $F(1, 10) = 6.25, p < .01$ )、直接的自己主張が間接的自己主張よりも高得点であった。NA(不快感情)得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった ( $F_s(1, 10) = 0.08, 4.74, 3.06, ns$ )。友人満足感得点において、自己主張方略の主効果が有意で ( $F(1, 10) = 5.71, p < .01$ )、間接的自己主張の方が直接的自己主張よりも高得点であった。負担感得点において、自己主張方略の主効果、文脈の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった ( $F_s(1, 10) =$

2.83, 1.83, 0.79,  $ms$ ), 適切さ得点において、自己主張方略の主効果が有意で ( $F(1, 10) = 9.64, p < .01$ )、直接的自己主張よりも間接的自己主張で高得点であった。

#### 考察

実験2における3つの場面では、それぞれ若干異なった傾向が結果として示された。したがって、場面ごとに分けての考察を行う。

場面1: アルバイトのシフト交代の依頼 話し手の自己主張方略として、間接的自己主張の方が直接的自己主張よりも聞き手にとっての友人満足感が高く、負担感が低いことが示された。また、話し手の自己主張の正当性が高い文脈では低い文脈と比べ、友人満足感が高く、負担感が低いことが示された。さらに、適切さについては、自己主張方略と文脈との交互作用が認められ、話し手の自己主張の正当性が高い文脈では、直接的自己主張も間接的自己主張も同程度の適切さと評価されるが、正当性が低い文脈においては、直接的自己主張の適切さが間接的自己主張の適切さよりも有意に低く評価されていた。

これらの結果から、アルバイトのシフト交代を依頼するような場面において、話し手が聞き手に対し一度もシフトを代わってあげたことがないような(自己主張の正当性がより低い)場合、話し手は直接的に自己主張するよりも間接的に自己主張することで、聞き手からより適切と評価されると考えられる。

場面2: 貸したお金の返済請求 場面2においては、自己主張の正当性が高い文脈での聞き手の不快感情が増すことが示された。一見すると話し手の自己主張の正当性が高いほど、聞き手もその正当性に納得し不快感情が抑制されると考えられる。しかし、場面2の貸したお金の返済請求という場面の特性として、「お金を借りているだけでも申し訳ないのに、返済期限を過ぎている(返済請求の正当性が高い)ことで一層申し訳なく感じる(内省報告より)との理由が考えられる。統計的に有意な差は得られなかったが、お金を借りているという「負い目」を感じやすい場面2においては、直接的自己主張よりも間接的自己主張によって返済請求を受けた場合に、「より罪悪感が増す」との内省報告も得られた。この点からも場面2は、場面1、3とは異なった特徴をもった状況であったと考えられる。

場面3: 飲み会の誘いに対する断り 場面3においては、直接的自己主張に比べ間接的自己主張では、聞き手からより友人満足感と適切さが高く評価された。一方で、間接的自己主張に比べ直接的自己主張では、聞き手から快感がより高く評価された。

3 場面全体 3つの場面を通して、概して間接的自己主張が直接的自己主張よりも望ましく評価されていた。こ

の実験2の結果は、先行研究(Wilson & Gallois, 1985)の結果を支持するものであった。

#### 総合考察

本研究では、話し手による自己主張の正当性という文脈の変化によって生じる、話し手自身の自己主張方略の変化と、自己主張に対する聞き手による印象評価の変化の双方を検討することを目的とした。

実験1では、話し手の自己主張の正当性が異なる2つの文脈における、話し手の自己主張方略の変化について検討した。自己主張の正当性が低い文脈では、話し手はより多くの謝罪表現を用い(全場面)、また交換条件の提示(場面1)や直接表現を避けた(場面3)冗長な自己主張を行う傾向にあること(全場面)が明らかになった。この結果は、自己主張の正当性が高い文脈ではより直接的自己主張が多く、正当性が低い文脈ではより間接的自己主張が多いというように、文脈によって話し手が最適な自己主張方略を選択していること(Brown & Levinson, 1978)を示唆している。

実験2では、話し手の自己主張の正当性が異なる2つの文脈における、直接的自己主張および間接的自己主張に対する、聞き手による印象評価を検討した。その結果、場面によって異なった結果が得られた。場面1では、間接的自己主張の方が、直接的自己主張よりも、友人満足感が高く、負担感が低いことが示唆された。特に、話し手の自己主張の正当性が低い文脈では、直接的自己主張の適切さが低下するが、間接的自己主張を用いれば聞き手からの適切さの評価を下げずに維持できると考えられる。場面2でも、間接的自己主張の方がより話し手を聞き手にとって望ましい友人であると認知され、より適切であると肯定的な評価を受けた。

したがって、率直な自己主張を重要視する欧米文化に対し、少なくとも日本人大学生においては、直接的自己主張よりも間接的自己主張が好意的に受け取られる可能性が考えられる。一方で、本研究からは、直接的自己主張は間接的自己主張よりも快感を喚起することも示唆された。これらのことから、直接的自己主張と間接的自己主張は、「聞き手にどう受け取られたいか」という話し手のもつ関心や目的(三田村・松見, 印刷中 a)によって異なった有用性をもつと考えられる。

本研究の結果から、アサーションにおける自己主張方略は、文脈により柔軟に使い分けことが自然であり、かつ聞き手にとって適切であることや好ましい印象を与える上でも自己主張方略の使い分けが重要であることが示唆された。今後、アサーション・トレーニングにおいては、従来の率直な自己主張(直接的自己主張)に加え、本研究で得られたような、より他者配慮的な自己主張(間接的

自己主張もトレーニングすること(三田村・松見, 2009b; 田中・中島, 2005)が期待される。

### 引用文献

- Argyle, M., & Henderson, M. (1985). *The Anatomy of Relationships: And the rules and skills needed to manage them successfully*. UK: Penguin Books.
- (アーガイル, M. ヘンダーソン, M. 吉森 護(編訳) (1992). 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1978). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Greenberg, M. S., Block, M. W., & Silverman, M. A. (1971). Determinants of helping behavior: Person's rewards versus Other's costs. *Journal of Personality*, **39**, 79-93.
- 平木典子 (1993). アサーショントレーニング—さわやかな「自己表現」のために 日本・精神技術研究所
- 平木典子 (2004). アサーション・トレーニング 現代のエスプリ 450 至文堂
- Holtgraves, T., & Yang, J.-N. (1990). Politeness as universal: Cross cultural perceptions of request strategies and inferences based on their use. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 719-729.
- 石川有紀子・無藤 隆 (1990). 要求表現の文脈依存性: その規定因としての役割関係 教育心理学研究, **38**, 9-16.
- カノックワン・ラオハブナキット (1995). 日本語における「断り」 日本語教科書と実際の会話との比較 日本語教育, **87**, 25-39.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- Lange, A. J., & Jakubowski, P. (1976). *Responsible assertive behaviour: Cognitive Behavioral Procedures for trainers*. IL: Research Press.
- 三田村 仰 (2008). 行動療法におけるアサーション・トレーニング研究の歴史と課題 人文論究 (関西学院大学人文学会), **58**, 95-107.
- 三田村 仰・松見淳子 (2009a). 自由記述によるアサーション抑制要因の検討 言いたいことが言えない理由としての他者配慮 不安障害研究, **1**, 343-344.
- 三田村 仰・松見淳子 (2009b). 発達障害児の保護者向け機能的アサーション・トレーニング 行動療法研究, **35**, 257-269.
- 三田村 仰・松見淳子 (印刷中 a). アサーション(自他を尊重する自己表現)とは何か? “さわやか”と“しなやか”, 2つのアサーションの共通理解を求めて 構造構成主義研究
- 三田村 仰・松見淳子 (印刷中 b). 相互作用としての機能的アサーション パーソナリティ研究
- 岡本真一郎 (1986). 依頼の言語的スタイル 実験社会心理学研究, **26**, 47-56.
- Okamoto, S. (1992). Expressions of request in the Japanese language: Requesters' considerations for requestees' cost. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 211-221.
- Price, R. H., & Bouffard, D. L. (1974). Behavioral appropriateness and situational constraint as dimensions of social behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 579-586.
- Rakos, R. F. (1979). Content consideration in the distinction between assertive and aggressive behavior. *Psychological Reports*, **44**, 767-773.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.
- 清水裕士・小杉考司 (印刷中). 対人行動の適切性判断と社会規範 「社会関係の論理学」の構築 実験社会心理学研究
- 田中共子・中島美奈子 (2005). ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み 異文化間教育, **24**, 28-37.
- Thomas, J. (1995). *Meaning in interaction: an introduction to pragmatics*. London: Addison-Wesley.
- (トマス, J. 浅羽亮一 (監修) (1998). 語用論入門 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味 研究社)
- 宇佐美まゆみ (1995). 談話レベルから見た敬語使用 スピーチレベルシフト生起の条件と機能 学苑, **662**, 27-42.
- Wilson, L. K., & Gallois, C. (1985). Perceptions of assertive behavior: Sex combination, role appropriateness, and message type. *Sex Roles*, **12**, 125-141.

## Experimental studies of the context dependent nature of assertiveness:

### Perspectives of speakers and listeners

Takashi MITAMURA (Department of Psychology, Kwansei Gakuin University)

Junko TANAKA-MATSUMI (Department of Integrative Psychological Science, Kwansei Gakuin University)

Assertiveness is generally defined as “appropriate and forthright assertion”. On the other hand, indirect assertion is often considered as a polite form of assertion (Brown & Levinson, 1978). The present study investigated the effect of context with either high or low legitimacy of speaker's assertion on the speaker and listener. In Experiment 1, 108 participants responded in writing to situations which required requesting or refusing. Results revealed that participants responded with fewer letters and more phrases of apology in low legitimate assertion context than in high legitimate assertion context. In Experiment 2, 33 participants as listeners evaluated impressions of both direct and indirect assertion models. Results revealed that indirect assertion model was evaluated as being more appropriate than direct assertion model in low legitimate assertion context. Results of the present study indicated context dependent nature of assertiveness. Effective assertiveness is not always forthright. Indirect assertiveness is can be effective in some context.

Keywords: assertiveness, context dependency, interpersonal communication, politeness.